

第 2 次 世 界 大 戦 敗 戦 前 後 の 助 産 師 の 活 躍 — 90 歳 現 役 助 産 師 の 語 り か ら —

佐 野 尚 子

要 旨

本稿は、第二次世界大戦末期から戦後にかけての混乱の時期の助産師の活動について、二人の現役助産師から聴き取り調査した結果の報告である。多くの先輩助産師達の活躍については、日本各地の産婆時代から現代まで様々な角度で調査がされて来ているが、この度は、鹿児島県で開業している 90 歳代の助産師二人から第二次世界大戦末期から戦後にかけての混乱の時期の助産師としての経験について聴けた。二人の助産師としての経験は、当時の母親達の置かれていた状況やそこに母子保健の専門家として関わった助産師の姿を伝えてくれる貴重なものである。戦争中の物資の不足した時代でありながら「産めよ・殖やせよ」という国策の中でお産をしていた女性たちや、戦後の混乱のなかで、母乳の出ない母親たちや子らのために乳房マッサージやミルクの確保に奔走した様子を知り、今の物質的には豊かな時代にあって、これからの助産師が母子にどのように関わっていくか考えさせられる。

キ ー ワ ー ド

鹿児島県，産婆会，第二次世界大戦，GHQ，多産

I 緒言

産科医学の進歩により，多くの危険な出産から母子を救うことが出来るようになった．最新の医療機器で管理され，豊富な衛生材料を使って安全・安楽な出産が出来るようになったことは，母子やその家族にとって喜ばしいことである．しかし，多くの最新機器に取り囲まれてはいても，やはり産婦は暖かい人との関係の中での出産を求めているのではないだろうか．そして助産師はその場において暖かい手を差し伸べることができる職業である．

助産師はどの時代にあっても，妊産婦また生まれ来る命の幸福を願って暖かい手を差し伸べてきた．そのような先人の心を受け継ぎたいと願い，物資に不足していたと思われる第二次大戦中・戦後の厳しい時代に出産を取り扱ってきた先輩助産師達の体験を聴き，さらに後輩たちへと語り継いでいくことは意義のあることではないだろうか．

表1. 男女別出生数及び出生率

2-24 Live Births by Sex and Sex Ratio of Live Birth (1872--2004)

年次 Calendar year	出生数 Live births			出生率（人口 1,000につき） Birth rate (per 1,000 Persons)	出生性比 （女100 につ き） Sex ratio of live birth (per 100 females) 1)
	総数 Total	男 Male	女 Female		
明治 5年 1872 2)	569,034	290,836	278,198	16.3	104.5
6 1873	809,487	414,429	395,058	23.1	104.9
(省略)					
昭和 16 1941	2,277,283	1,165,437	1,111,846	31.8	104.8
17 1942	2,233,660	1,145,068	1,088,592	30.9	105.2
18 1943	2,253,535	1,155,983	1,097,552	30.9	105.3
19 1944
20 1945
21 1946
22 1947	2,678,792	1,376,986	1,301,806	34.3	105.8
(省略)					
平成 16 2004	1,110,721	569,559	541,162	8.8	105.2

(1) 昭和19年～21年は資料不備のため省略。昭和22年～47年は沖縄県を含まない。

総務省統計局 人口動態 2-24 男女別出生数及び出生率（明治5年～平成16年）より改変

戦中の母子統計については、昭和19～21年の厚生労働省等の人口動態統計（表1）を見ても、出生数、異常分娩などの記録がない。これは戦争末期の混乱と戦火による焼失などのためだと思われる。その時代に出産に携わった助産師達も既に90歳を超えており、当時の様子を語り継ぐ人もわずかとなってきた。そして、経験豊かな助産師達への聴き取り調査は、日本各地の産婆時代から現代まで様々な角度でなされ、報告されており、その活動については明らかにされつつある。

この度、鹿児島県の薩摩半島南端の近く喜入町と、大隅半島鹿屋市に住む90歳代の二人の開業助産師か

ら開業当時の活動について話を聴くことができた。二人の助産師としての経験は、当時の母親達の置かれていた状況やそこに母子保健の専門家として関わった助産師の姿を伝えてくれる貴重なものである。ここでは、二人の語りを中心に、戦争中の物資の不足した時代でありながら「産めよ・増やせよ」という国策の中でお産をしていた女性達の置かれていた状況や、当時の母子保健行政についての資料を参考にしながらその女性たちや子らのために奔走したであろう助産師達の活動について明らかにし、これからの助産師のあり方を考える一助にしたい。

Ⅱ 研究方法

研究方法：調査研究

調査時期：平成24年（2012年）8月

調査対象：A氏（97歳）、B氏（90歳）

倫理的配慮

両名には、聞き取りの際に録音することと、内容を論文として発表し、後輩たちへの教育に資することの了承を得た。

Ⅲ 産婆資格，時代背景

1. 産婆資格について

産婆資格は、明治元年（1868年）に産婆取締りに関する太政官布告がされ、明治7年（1874年）には、医政発布された中に産婆資格の条件が規定され、免許制度を規定している。つまり、それまで近隣の経験者の助けでお産を済ますのが普通だったものが、助産師を職業として公然と認められたのが明治7年である。明治9年（1876年）に産婆教授所が東京府病院内に開設

され，大阪医学校病院で産婆教育が開始された．統計上，助産師数が計上されたのは，この後明治11年（1878年）で，医療関係者数が計上されたのは，医師の次に早かった．明治25年（1892年）大阪の緒方助産婦養成所開設時に助産婦という呼称が初めて使用されたが，その後も戦後まで助産婦という名称は正式には用いられなかった（表2）．

表2. 保健師助産師看護師の資格の歴史年表

年号	西暦	
明治 元年	1868	サンバ取締りに関する太政官布告
7年	1874	医制発布された中にサンバ資格の条件が規定 免許制度を規定している（産婆が職業として認められた）
9年	1876	産婆教授所が東京府病院内に開設 大阪医学校病院では産婆教育が開始
25年	1892	大阪の緒方助産婦養成所開設時に助産婦と言う呼称が始めて使用された
32年	1899	勅令産婆規則公布 産婆の法制が全国で統一
大正 4年	1915	看護婦規則公布
昭和 2年	1927	日本産婆会結成
4年	1929	日本看護婦協会結成
16年	1941	保健婦規則公布 日本保健婦協会結成 *この年日本は第二次世界大戦に参戦
20年	1945	敗戦 GHQ公衆衛生福祉局(PHW)看護課長オルト着任
21年	1946	日本産婆看護婦保健婦協会結成
22年	1947	産婆規則が助産婦規則に改正 保健婦助産婦看護婦令公布
23年	1948	日本助産婦会解散
25年	1950	第1回甲種看護婦国家試験実施 第1回助産婦国家試験実施
30年	1955	日本助産婦会設立 日本看護協会会員助産婦大多数が協会を脱会

2 . 助産師数 看護師数 保健師数

表3. 助産師数・看護師数・保健師数

元号	西暦	助産師	看護師	保健師
明治 7年	1874	-	...	-
8	1875	-	...	-
9	1876	-	...	-
10	1877	-	...	-
11	1878	12,009	...	-
12	1879	12,199	...	-
13	1880	17,784	...	-
14	1881	18,734	...	-
15	1882	19,035	...	-
20	1887	29,863	...	-
25	1892	32,928	...	-
30	1897	35,375	...	-
35	1902	25,709	...	-
40	1907	26,677	...	-
43	1910	27,674	c) 11,574	-
44	1911	d) 28,362	c) 13,056	-
大正元年	1912	29,376	13,925	-
5	1916	32,840	22,614	-
10	1921	36,657	31,581	-
昭和元年	1926	44,776	48,056	-
5	1930	50,312	70,518	-
10	1935	59,560	103,190	-
15	1940	61,368	130,978	-
16	1941	62,742	142,349	...
17	1942	52,991	112,118	...
18	1943	34,665	78,135	...
19	1944	14,883	29,679	...
20	1945	17,915	31,389	...
21	1946	61,652	155,543	h) 17,080
22	1947	67,238	155,531	14,535
23	1948	70,354	136,493	15,976
24	1949	74,034	124,335	14,728
25	1950	74,832	128,044	...
30	1955	55,356	120,739	12,369
35	1960	52,337	123,226	13,010
40	1965	43,276	133,985	13,959
45	1970	28,087	127,580	14,007
50	1975	26,742	175,841	15,962
55	1980	25,867	248,165	17,957
61	1986	24,056	339,258	22,050
63	1988	23,320	373,143	23,559
平成 2年	1990	22,918	404,764	25,303
4	1992	22,690	441,309	26,909
6	1994	23,048	492,352	29,008
8	1996	23,615	544,929	31,581
10	1998	24,202	594,447	34,468
12	2000	24,511	653,617	36,781
14	2002	24,340	703,903	38,366
16	2004	25,257	760,221	39,195

総務省統計局の医療関係者数の記録から改変

- (1) 明治8～13年は、各年度末（翌年の6月末日）現在，明治14年以降は，年末現在。明治7年の調査時点は不明。
- (2) 明治11年まで沖縄を，9年まで北海道を含まない全国。明治7年は東京府を，9年は鹿児島県を含まない。
- (3) 明治13年は，開拓使（北海道）と沖縄を，14年は開拓使を含まない。
- (4) 明治15年は福島，札幌，根室を，16年は佐賀，鹿児島を含まない。
- (5) 昭和17～21年は戦中戦後のため，報告のあった県分の合計である。
- (6) 昭和21～46年は沖縄県を含まない。
- (7) 保健師，助産師，看護師，准看護師，あん摩マッサージ指圧師，鍼師，灸師及び柔道整復師は就業者。
 - 1) 昭和26年まで外国人を含まない。
 - 8) 昭和20年までは産婆数。明治32年～昭和26年は，全有資格者数。
 - c) 外国人1人及び鍼・灸の兼業1人を含む。
 - d) 清国にて開業のため登録を受けた者，1人を含む。
 - h) 全有資格者数。

3. 敗戦当時のGHQ（General Head Quarters;連合軍総司令部,以下GHQと略す）の看護制度改革とアメリカの助産師制度（表4）について

表4. アメリカ合衆国におけるナース・ミッドワيف関連の年表

1910 (明治43年)	医師によるナース・ミッドワيف正当性の主張「産婆は必要悪。看護婦有資格者が研修を受けるべき」
1918	NYマタニティーセンター・アソシエーション(MCA)設立
1920	このころ半麻酔分娩が登場
1932 (昭和7年)	MCAにおいてナース・ミッドワيفの養成が開始
1945 (昭和20年)	全米公衆衛生看護会(the National Organization for Public Health Nursing) ナース・ミッドワيف部門設立
1945	ニューメキシコ州が初めてナース・ミッドワيفを法的に認知
1955	ナース・ミッドワيف単科大学(the American Colledge of Nurse-Midwifery:ACNM) 設立。このころより8ヶ月～2年程度の課程修了者にナース・ミッドワيفの資格を与える制度が登場
1968	アメリカ看護協会の公式表明「ナース・ミッドワيفは専門看護婦である」。このころより1971年にかけてナース・ミッドワيفの雇用が急増
1971	ACNM報告「ナース・ミッドワيفは全米で1256人」
1975	すべての州でナース・ミッドワيفが法的に認知される

白井千晶 「助産師が足りない 過去から未来へ」 紙RIBORN15号

2005年 より改変

敗戦当時，GHQが日本の看護の改革をしようとした。GHQは，日本の看護婦の地位向上のためには，看護職が団結し政治的権力を得るべきであり，そのためには産婆，看護婦，保健婦は同じ看護業務を行う職能として一体化するべきであると考えた。そして，産婆会を国粹色が強く，民主化が必要であるという理由から，半ば強引に解散させ，三つの職能団

体を統合した日本産婆看護婦保健婦協会を設立させた。

この背景には、アメリカの助産師に当たるナース・ミッドワ이프の歴史が浅く、ヨーロッパのように助産師の教育制度が確率されていかなかったことで、教育レベルの低い無免許の助産婦たちが多くの出産に携わることで、妊産婦死亡率が高いといわれていたからである。平岡は「当時の日本社会における産婆という職業をアメリカ人看護婦たちは十分理解していなかったことが考えられる」¹⁾と述べている。さらに金子も「日本側の議論の中でオルト課長(Grace Elizabeth Alt)等 GHQ 側がなかなかわかりにくかったことは、『助産業務』でした。～中略～アメリカには当時助産婦の制度もないし、実務者もなく、出産はほとんど病院において医師によって行われていたからです」と述べている⁽²⁾。このように GHQ の日本の産婆への無理解は、日米の看護職の歴史や教育、制度が全く異なっていたことに起因するものであった。

IV 二人の語り

A 氏は、大正 4 年(1915 年)に鹿児島県喜入瀬々串町に生まれた。この地域は錦江湾沿いに細長い地形をなし、その約 8 割を占める高地と長い海岸線で構成されている。居住地域においては、狭小な平地に住宅が密集しており、車がすれ違えない道路、緊急車両が入れない道路など狭い道路が多い。

(A 氏の語り)

昭和 5 年(1930 年)までは、取り上げ婆さん(免許

のない人)がいました。昭和2年(1927年)の弟が出産の際に母が亡くなりました(当時A氏は12歳)妊娠腎ではなかったかと思います。身体が腫れていました。昭和16年(1941年)8月に大阪府東条産婆学校普通科を卒業し、一人前になったら帰って来いと言われていたので昭和17年(1942年)4月に帰ってきて瀬々串町の自宅で開業しました。開業当時の開業助産婦の管轄は警察で^(注1)、巡査が毎日異常はないか、捨て子はいないかと回ってきました。戦争中は助産婦会の活動もありませんでした。瀬々串は、山の近くで川の無い地域だったし、水道も無く井戸も少なかったので水が不足していました。夜のお産では沐浴もできず、翌朝沐浴に行っていました。橋の下でお産をしたこともありました。「産めよ・殖やせよ」の時代であり、近所の人を迎えに来て、自転車の後ろに乗っていった事もあります。消毒どころではなかった。ほとんどの家が瓦葺家屋で裸電球が1個しかなくろうそくの灯でお産をさせ、納屋で産む事もありました。40歳～50歳の人もお産をしていましたし、10人くらい産む人もいました^(注2)。

腰巻、半纏、前掛けの時代に大阪から帰ってきて、洋服を着てサンダルをはいて回ると珍しがられ、振り返って見られました。田舎の風習でお産は汚いものと思われていました。産まれたと言ってくれるな、大きい子どもを産んだということも言ってくれるなという時代でした。陣痛が始まっても山や畑に出て行っていた。お産を恥ずかしいものと捉えていました。自分が大阪から帰ってきて、お産は清潔に取り扱わなければならない、日当たりの良い、おもての座敷でさせなければならないということを知らせるのに1年かか

りました。実家で産んで、1週間で帰り、親戚を呼んでお茶を出しますがそれを褥婦にさせていました。また実家に帰り、33日で帰ってきて、寝ていることはなく1週間したらもう働いていました。田舎はどこも同じだったでしょう。45歳でお産をする人がざらにいました。

大阪でも自宅分娩が多く（注³）、入院分娩は貧困者が多かったです。当時、開業助産婦のところに住み込んで学校に通っていて、学校から帰ったらお産と一緒に連れて行ってもらっていました。自宅分娩が多く、病院分娩は少なかった。大阪では、自宅分娩でも明るい部屋で付き添いもいました。自分は初めのうちは朝鮮人のお産が多かったです。お産に使うぼろきれを探して押入れを開けると、子どもたちがずらっと入っていたこともあります。外では、男たちが昆布を煮ていました（食べるためだったようだ）。1週間したら助産婦のところに御膳が届いていました。

終戦後は引揚者が帰ってきてお産が増え、一晩に3回呼ばれる事が一月に3回ほどありました。お産があると、遠いところまで兄の自転車の後ろに二人乗りして行っていました。電話もない時代で警察が迎えに来たこともあります。助産婦という名称になってから、血圧測定や検尿ができるようになりましたが、大阪では（それ以前から）行っていました。戦争中、戦後も薬が無い時は柿の葉や枇杷の葉を乾燥させてジツボサン（注⁴）と煎じて飲ませるとタンパクがひけました。ジツボサンは福岡から自転車で売りに来ていました。ジツボサンや他の薬を近くの助産婦に配っていました。自分は一番若かったので（助産婦の仲間の中で）雑用に使われたのです。

母乳が出ないと精米所から糠をもらってきて飲ませたり，新生児に飲ませる砂糖も滋養糖もなく，母乳が出ないので何とかして欲しいと役場に行つて頼んだりしました．役所が進駐軍に行つてもらつてくれました．氷砂糖の配給はありました．おも湯を薄めて飲ませたり、白湯を3日くらい飲ませたりしました．母体の栄養状態が悪く母乳が出ないためにマッサージに大変な思いをして，母乳マッサージの勉強のために岩手県へ行ったりもしました．現在も母乳のマッサージだけは続けています．取り上げた人数は，新聞に載りました．

近くに知覧特攻隊の基地があつたので，進駐軍が来ていて，このあたりに軍を置こうとしていたらしいです．日本の助産師はお産の技術が上手なので10人ぐらいアメリカにつれていこうとしていたと聞いたことがあります．アメリカ軍の偵察機が墜落し，米兵が2人亡くなり，近くのお寺に安置されたのですが，遺体をきれいにしてほしいと依頼されました．その飛行機から帳簿が見つかり，助産師を連れていくことが書かれていたらしいです．九州一帯に，進駐軍が来たら返事をしないようにというおふれが出ていました．

お産のことで苦労したことは，あまりたくさんはありません．産婦人科に連れて行つて産ませていて（今で言うオープンシステム），帝王切開になつたのは1件だけでした．胎児死亡は2人いました．横位になつていて，ブジーで産まれました。5か月になっていましたが胎内死亡でした．家でお産があり急いで帰ってみると骨盤位でした．足が半分出ていましたが，無事に産まれました．逆児は病院では帝王切開になるので，直してあげることがありました．異常を扱ったことは

少ないですが、45歳にもなると出血も多くタンポンをしたりして対処しました。尖刀やコッヘルなどは煮沸消毒して行っていました。清潔な綿花もなく自宅からきれいな綿を持って行きました。一度は橋の下でお産をし、防空壕のときなどムカデが新生児にくっついていたこともありましたが、その子は無事に成長しましたが新生児の腸管出血の事例もありました。メレナも一人しか経験していません。

育児相談では、子育ての悩みはあまりありませんでした。核家族ではなかったから、家族で解決していました。農家が多かったので、悩み事を聞いたことはありませんでした。今相談に来るのは母乳の事です。新生児訪問にも役場に頼まれてよく行っていました。

産婆学校に行った動機は、人にできないようなことをしたいと思ったからです。洋裁の学校も皆行っていました。産婆学校に行ったらお嫁に行けないからやめろと周りの人には言われましたが、大阪にたまたま親戚があり、大阪に行って産婆さんのところに住み込みで学校に通いました。学校に入るのは難しかったのですが、村長さんが書類を書いてくれました。自分は運が良かったと思います。

B氏は、大隅半島の中心地鹿屋市に大正11年（1922年）に生まれ、昭和14年（1939年）に看護婦免許を取得、昭和17年（1942年）に産婆試験に合格した。昭和18年（1943年）に助産所開設、戦後産婦人科勤務を経て再び開業している。

（ B氏の語り ）

11人兄弟（4番目）でしたが、私が喧嘩大将でした。

柿の木に登って熟柿を取っていた時、枝が脆くて折れやすかったため、枝が折れて下に落ちました。妹たちが「姉ちゃんが死んだ」と言って大騒ぎになりました。母が水を汲んで来て私の胸に水を勢いよくかけ、気絶している時は水を胸にめがけて掛ければ良いと教わりました。母は11人も子どもを産みました。その母の勧めもあって助産婦の勉強をすることになりました。また、学校で運動選手（陸上の選手）だったころ、練習の後ですき焼きを作ろうと肉を切っているところを見た先生が、血を見ても平気ならこの職業（看護婦）を勧めてくれました。

助産師になった当初は戦争中のことで、自宅分娩が多く、「産めよ・殖やせよ」の時代でした。開業している産婆の家に住み込んで沐浴や多数の出産に立ち会って自信をつけました。1年後実家の近くで開業しましたが、鹿屋は航空隊もあり空襲が激しくなっていました。戦争中は防空壕の中でお産をした事も、新生児訪問では道路が危ないとのことで山間を自転車で身を細めながら向った事もありました。空襲に備えて煙を出すことができず、沐浴も毎日ではできませんでした。産まれたら冬は毛布や綿入れに包み込み、夏はバスタオルがあれば良い方で、布に包み母親の布団の中に抱き込んでいました。母親の栄養不足はもちろん、睡眠不足に、空襲におびえ、疲れて母乳は出るはずもなかったのです。訪問するとまずタライに水を張り、日向で水を温め、母親の診察・母乳分泌の程度や子宮収縮状態を見て、乳房マッサージをし、太陽の光で温めたぬるいお湯で沐浴を行いました。

終戦の日の朝早くお産で呼ばれ、通されたところは杉林の中の防空壕でした。防空壕の奥には近くの住民

が避難し前の晩から泊っていたのですが、それと知らずランプの灯りで無事出産しました。産声を上げた頃、日本中の人々は敗戦を告げる玉音放送を聞いていたのですが、お産をしていた私は知りませんでした。いい空気を吸いたいと壕の外に出ると、あちこちに火が出ていて、夫から日本が負けたということを知られました。

B氏は、戦後も病院で助産師として働き続け、再び開業もして89歳の現在も時々乳房マッサージなどしながら、母親達の相談に乗っている。

V 考察

看護職の歴史を見ると、職業として最初にその名称が出てくるのは助産婦（産婆）である。法的にきちんとその職業が認められたのは明治に入ってからかもしれないが、古くは奈良時代以前からその役割を果たす女性がいた。明治期に職業として確立されたのも、看護職の中で最も古い。

戦後GHQが入ってきて本格的に看護教育の改革が始まった。産婆、看護婦、保健婦はそれぞれの誕生時期や独自の職務内容があり、教育も異なるにも関わらずGHQはこの3職種を一本化しようとした。しかし、米国と日本では看護制度も異なり、日本古来の産婆の伝統もあってGHQが考えるような看護職を1本化した教育の実現には至らなかった。またGHQは、後の看護協会となる三つの職能団体を統合した日本産婆看護婦保健婦協会（後の日本看護協会）を設立させ、産婆会は国粹色が強く民主化が必要であるという理由から半ば強引に解散させたが、のちに日本看護協会とは別に日本助産師会が結成されている。

アメリカにおいて専門職としての助産師（ナース・ミッドワイフ）が認められたのはそれほど古くはない（注5）。ニューヨーク・マタニティーアソシエーション（MCA）でナース・ミッドワイフの教育が始まったのは大正7年（1932年）のことで、昭和20年（1945年）に全米公衆衛生看護会にナース・ミッドワイフ部門が設立されている。一方日本では、明治9年（1876年）に公立の産婆教育機関が開設されており、明治32年（1899年）には産婆の法制が全国統一され、昭和2年（1927年）に日本産婆会が結成されている。職能団体としての歴史からいうと、日本の方がずっと古い。

さて、A氏の助産師を目指した動機の中に、「人にできないようなことをしたいと思った」とある。周りからは、お嫁に行けなくなるからやめろと言われてもいる。自分が、入るのが難しい助産の学校に入れたのは、運がよかったとも振り返っており、この仕事を選び、この年齢まで続けてこられたことを誇りに思っていることが伝わってきた。

B氏もまた、「母の勧めもあって」、学校の先生が「血を見ても平気ならとこの職業を勧めてくれた」とB氏の適性を認めてもらったことがこの仕事に繋がったことを語っていた。B氏も90歳の現在まで現役で助産師として仕事ができることを誇りに思うからこそ、多くのことを語ってくれたのではないかな。

A氏の語りの中に戦争中は助産師会の活動も無かったとあるが、それ以前は日本各地で産婆会の地方部会が活発に活動していた（注6）。A氏が産婆試験に合格した昭和16年（1941年）の助産婦数は、62,742人、B氏は翌年で助産婦数は52,991人である。その後、戦争が激しくなり、その翌昭和18年は34,665人、更に

次の昭和 19 年（1944 年）は 14,883 人，終戦の昭和 20 年（1945 年）には 17,915 人となっている．昭和 19 年・20 年の頃は出生数もその他の人口動態統計も不明であり，また他の医療系の職種（医師、歯科医師、薬剤師、看護師、保健師）においても極端に数が減少している．敗戦前のかなり混乱した時期で統計的にも正確な把握ができなかったことを示していると思われる．

当時は，国の機関でさえも混乱して，あらゆる物資・食料も不足し主な働き手を戦争に取られていた．そのような時期においてもお産はあり，それに携わる助産婦達は組織としての活動ができないなかであっても，A 氏の「ジツボサンや他の薬を近くの助産師仲間に配っていた」という言葉からも分かるように協力し合って活動していた．

戦争中は，出産を防空壕の中でしたということにも驚かされる．お産という祝福されるべき出来事が，当時は「隠したい事」であったとしても，暗い穴倉である防空壕で行われたのだ．もちろん空襲などの危険を避けるためという理由があったかもしれないが，産婦や家族の不安は計り知れない．同じ時代を生きた他の助産師たちの様子を吉井（1993）が調査し，同じようなことが記されている．「～忘れられないのは，戦争中，空襲警報下でのお産．防空ごうの闇の中でへその緒を切ったり，船で島に急いでいる海上で機銃掃射を受けたりしたことだという．離れた島では，間に合わずに死なせた悲しい思い出も多い」^{3）}当時の助産師たちが，過酷な状況下で必死に母子を守ろうとした様子が伝わる．また，戦争中は食糧も不足していたので母乳の出ない母親も多くあり，母乳を飲ませられない乳児のた

めに奔走した様子も伝わってきた。なんとか母乳の分泌を促そうとマッサージをしたり，役所に掛け合ったりして母子の栄養を確保している。たまたま，喜入も鹿屋も日本の軍事施設の近くにあった事から，進駐軍が駐屯していたことで，ミルクが手に入ったという幸運なこともあったようだ。

さらに，語られた中で特に印象的なのは，女性たちが国のために子どもを産まなければならなかった事である。自分の身体を犠牲にして，みすみす兵隊にとられて死んでしまうかもしれない子どもを産まなければならなかった。もちろん当時それを当然の事として受け止めた女性もいたかもしれないが，「産む・産まない」の選択の余地のない妊娠，また高齢出産の例も数多くあった。子どもが生まれることを恥ずかしいと感じ，隠したいと思っている女性がいる一方で，表彰される事を誇りとして 10 人以上も出産した女性も多くあったのである。それも 40～50 歳代の女性がいたのである。

高齢出産の増加が社会問題化されてきている昨今，問題は初産年齢の高齢化である。当時は出産が若い年齢のときから始まり，産み終わるまでの期間が長かったということだろうが，母体にとっては大きな負担であったと考えられる。終戦後のベビーブームの後には，多くの助産師たちが，受胎調節の指導にも活躍したことは，その母体を守ることに直結した活動だった。

まとめ

二人の先輩助産師の話を聴く事ができ，戦争中の女性達と助産師達の置かれた過酷な状況を断片的ながら知ることができた。

特に鹿児島という男尊女卑の土地柄だからというわけではないと思うが、お産を汚いものにとらえ、家の中でも暗い納屋や納戸部屋でろうそくの灯りを頼りにお産をし、清潔に取り扱うという考えのない時代に、お産は日当たりのいい表の座敷でさせなければならぬということを知らせ、清潔に取り扱わなければならぬということの啓蒙活動も積極的に行って、母子保健に大きな貢献をしていたことがわかった。

先輩助産師の体験を聴きながら、これからの助産師はこの先人たちの体験をどのように生かして、新しい命の誕生に向き合っていけばいいのか、真摯に考えていかなければならないと教えられた。

謝 辞

多くの貴重な体験を語って下さった先輩助産師のお二人に深く感謝申し上げます。このような機会を設けてくださった、鹿児島県助産師会の皆様にも感謝申し上げます。

注および引用・参考文献

注 1：戦前は、看護業務を所管する独立した行政組織はなかった。看護婦規則は内務省の制定した取締規則であり、衛生に関する取り締まりは警察行政の管轄であった。

注 2：敗戦当時も、家庭分娩は全分娩の 98%，施設分娩は異常分娩かあるいは経済的に困窮した人々が大部分であった。日本で施設分娩が進んだのは 1960 年代である。

注 3：昭和 15 年（1940 年）厚生省は、人口増加策と

して優良多子家庭表彰要領を策定して、同年 11 月 3 日には、10,336 家庭が表彰された。その表彰の基準は、「父母を同じくする満 6 歳以上の嫡出児を育て、子どもに死亡者が無く、心身ともに健全、父母・子ども共に性向善良であること」とされていた。その後も表彰は毎年行われ終戦まで続いた。「産めよ・殖やせよ」という国策により、表彰される女性の陰で、不妊とされた女性たちが肩身の狭い思いをしたであろうことは想像に難くない。

注 4：ジツボサンは、実母散という和漢の家庭薬のことである。産前・産後、血の道、月経不順、つわりなどに用い、江戸中橋の木谷藤兵衛店を本店として広く流行した。血の道とは、産褥時・月経時・月経閉止期などの女性に現れる頭痛・めまい・寒気・発汗などの諸症状のことである。“ちみち”ともいう。

注 5：日本と違い、アメリカのナース・ミッドワ이프は医師の要請によって成立したものである。アメリカでは昭和 15 年（1940 年）時点で既に病院出産だけで 6 割に達しており、4 割が病院以外（家庭分娩）だった。立会い者は 9 割が医師であったため、分娩までの手間や付き添う時間が長引くにつれ、医師たちから「ナース・ミッドワIFE を作って彼女たちが正常産を」という声があがった。もちろん、助産婦という職業が全く無かったわけではない。もともとヨーロッパ各国で教育制度の確立した助産婦が認められていたが、米国ではその発展がされなかったのである。

注 6：鹿児島県助産師会では、平成 23 年（2011 年）に鹿児島県助産師会創立 90 周年誌を発刊しており、会創立以来精力的に活動がされてきた様子が記され

ている。昭和 2 年(1927 年)に結成された産婆会は、中央システムの下部組織としての～県支部という考え方ではなく、都道府県団体の集合体という性格を持って長く続けられ、終戦に至る。終戦の際 GHQ によって解散を余儀なくされているが、昭和 30 年(1995 年)再度日本助産師会として結成。

- 1) 平岡敬子(2000): 占領期における看護制度改革の成果と限界－保健婦助産婦看護婦法の制定過程を通して－, 呉大学看護学部看護学統合研究 2(1): 11-27
 - 2) 金子光(1985): 保助看法制定をめぐって, 看護, 37 巻 1 号, 67-70
 - 3) 吉井和子(1993): 薩摩おごじょ－女たちの夜明け－, 春苑堂書店
-
- ・金子光(1992): 初期の看護行政: 看護の灯高くかがけて, 日本看護協会出版会
 - ・高橋美智(1996): GHQ が推進した看護改革 看護体制・勤務体制の変遷, 週刊医学会新聞第 2217 号, 医学書院
 - ・大石杉乃, 芳賀佐和子(2004): 保良せきと第二次世界大戦後の看護改革, 慈恵医大誌, 119-303-313
 - ・Catherine Carr, 渡辺邦彦訳(1998): アメリカのナース・ミッドワイフのキャリア開発, 助産婦雑誌 Vol. 52 No.1 48-53
 - ・大林道子(2002): 助産婦の戦後, 勁草書房